うまじむら新聞

令和６年春
発行
馬路村農協

イタドリと、オーガニックビレッジ。

馬路の春の旬、イタドリ。大人から子どもまでもが食す、村では王道の山菜です。
イタドリは水分が多く、もちろんですがその地の水を吸って育ち、きれいな水の地ではアクが無く、美味しいイタドリに育つとも言われています。
美味しいイタドリを食べたい。そのためにはきれいな水をいつまでも守らなければならない。
村の外に美味しさを届けるだけではなく、自分たちが美味しさを感じられる環境を保つこと。
それが我々の考えるオーガニックビレッジでもあります。
この春、馬路村の新たなプロジェクトがはじまります。

フラフの、春がきた。

村の入口の朝日出地区に、こいのぼりとともに大きく上げられるフラフ。春になると子どもの成長を願い、山から切り出してきた大きな竿を立て、名前を入れたオリジナルのフラフを村の山風になびかせます。田舎の馬路村とはいっても最近では上がるフラフの数も減ってきて、村の中でもポツポツと見かける程度。朝日出地区のかずとくんも十年ほど前まで三人息子の大きなフラフを掲げてましたが、子どもも大きくなってからは、当然ながら上げることもなく、朝日出の春は何かシンボルがひとつ無くなったような感じでもありました。その息子も社会人となり村に戻ってきて、なんと子どもが生まれ、かずとくんが今度は孫のためにフラフを上げはじめました。朝日出になびくフラフを見ると、やっぱりコレコレ、と嬉しくなる村民。「準備するのが大変やけんど」と言いながらも、誰よりも嬉しそうなのはかずとくん。
村の春、入口で大きなフラフがなびいています。

ホトケノザ

村の道の至る所に生えている紫色の花ホトケノザ。この花の蜜を吸うのが、村の子どもたちのこの時期のトレンドです。帰り道に見かけると、ついつい手が伸びるようですが、皆の帰り道沿いは競争率が高く、花がすべて無くなっておるので、少し回り道をしながら、まだ吸われていない花の場所を見つけるそう。確かに、私も子どもの頃に蜜を吸っていた記憶はありますが、令和のこの時代にまだその行動が村で残っておることにひと安心。帰り道に買い食いをしたらいかん、と口酸っぱく言われておる子どもたちですが、ホトケノザならセーフです。

編集後記

「鏡よ、鏡・・」何か答えを知りたいときの代名詞としてよく使われそうな言葉ですが、結局は鏡に映った自分自身へ問いかけをして、内にある答えを引き出しているのではないか、という見方もできます。今回馬路村が発表するオーガニックビレッジ宣言。有機の取組を続けてきた馬路村ならではではありますが、その取組の延長ではなく、自分たちに問いかけながら、新たな村の形をこれからつくっていく必要があります。村にたたずむこの鏡は、馬路村をどのように映すのでしょう。

馬路村（うまじむら）への道

高知市から室戸方面に約51km 国道55号線を太平洋沿いに進むと安田町へ入る。
そして、左に大きい魚らが見えてきたら左へ曲り、安田川沿いをくねくね上がる。
県道12号線を走る事、20km、約30分。
ようやっと馬路村に着きます。

ブログ
日々馬路村
インターネットにて、あそびに来てね。
ホームページ www.yuzu.or.jp

馬路温泉
ツルツルのお湯です。
ゆっくりすごしに来ませんか。
宿泊やお問い合わせはこちら
0120-44-2026

過疎に生きる。

全国の市町村の中でも、高い有機率を誇る馬路村。最新の農水省の発表では馬路村内の田畑に占める有機農業の割合が81％ということで、他の市町村からは群を抜いた有機率の数字となっておりました。もともと少ない田畑の面積の中で、ゆずの有機栽培化に取り組んだことで、それほどに高い有機率となったのですが、ゆずの栽培に取り組む農家やそれに関わる村民たちも当たり前のようにその取り組みを行ってきた結果、しみついた空気感のようなものになっており、特別なことをしている素振りはありません。

今回のオーガニックビレッジ宣言について、村内の関係者と会議を重ねてきましたが、ゆずの取組だけに留めるものではなく村の中にどれだけ派生していけるか、形式的なものではなく村の新たなトビラにしよう、などなど熱い議論を村役場の会議室でしているときに、窓の外から手押しの運搬車のトントントンという音が飛び込んできて、まるで「何を議論しゆうがかね。そんなん当たり前やろうがね。」と言われているかのようでもありました。山のイノシシや川のアメゴ、山菜のイタドリなどを食し、自分たちが満足する暮らしを、自分たちでつくる。それを当たり前のような暮らしの形にしてきた馬路村。オーガニックや有機などという手段とは少し一線を画すようなものが存在しているのかもしれません。

様々な思いのある中で、それでも、だからこそ、我々は今回オーガニックビレッジ宣言を選択しました。これは「村のこれから」を考える一つのきっかけ。宣言することが目的ではなく、過疎で生きる我々がこれからの長い年月も豊かさを持ち暮らしていけるように。

今ある当たり前の暮らしの形と、これからの村としての取組。対外的ではなく、自分たちの豊かさが1％でも維持や前進をするため動いていこうと思います。

馬路村の人口が現在約８００人。かつて林業が盛んな時代は３５００人ほどがいたと聞きます。ゆずをはじめ村の中に産業ができてきているとはいえ、これから人口増への道筋は難しく、十年後、二十年後にはもっと人口が減るだろうと言われており、たとえ６００人となっても、村民の暮らしや村が維持できるような村づくりを目指しているところでもあります。過疎地の課題はそうそうと解決できるものではない、それは全国の山間地が感じていることであり、馬路村としても当然同じ。ある種開き直りのような取組をいかにできるか、が求められてもいます。過疎地だからこそ、過疎地にしかできない、オーガニックビレッジの取組があるのではないか。

改めまして、馬路村はこの春「オーガニックビレッジ宣言」を致します。

人口減少、高齢化。過疎で生きる、我々の暮らしを、これからも見守っていただければ幸いです。